

熊本大学附属図書館寄託 永青文庫の貴重書（三）
『詠歌大概抄・秀哥大畧抄』と『歌合類聚』

荒木 尚

宮内庁書陵部（東京都千代田区）には^{としひと}智仁親王（八条宮。後陽成天皇の弟）の質問に答えた細川幽齋自筆の書状「歌口伝心持状」一通が蔵されている。そのなかで幽齋は、

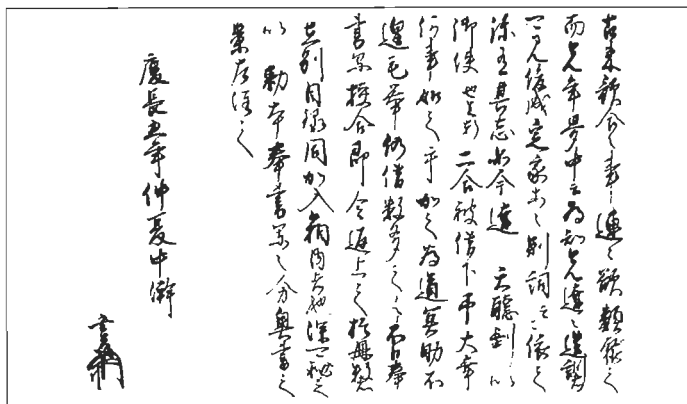
歌をよむ故実におゐては、詠歌大概に過たること御座あるまじく候。その外、定家の被書置たるものどもの歌以下可被付御心候

と述べている。定家歌論の真髓とされる『詠歌大概』を重視するこの発言は、藤原定家以降、和歌・歌学を志すほどの者は、すべて定家が基点であり、学ぶべき存在として認識されていたために他ならない。

天正7年(1579)1月、古今相伝の証明書^{あながい}を幽齋に与えた三光院三条西実枝^{さねえだ}が没すると、幽齋の周辺には、和歌・歌学の指導的立場にいるような人々はほとんど

いなくなった。幽齋は自然、伝受者から伝授者に転じ、歌道の指導的な場に出て、自ら求めて歌学や古典の世界に分け入っていくことになるのである。そこで幽齋は先行の歌学書や歌合、古典類を博搜し、その正当な受容に努め、二条家流の末裔としての地歩を固めていく。今回は永青文庫に蔵される『詠歌大概抄・秀哥大畧抄』と『歌合類聚』をとりあげる。

『詠歌大概』は作歌の原理と方法を簡潔明確に解く漢文体の歌論と「秀歌躰大略」と題する秀歌例とから成っていて、定家六十代の著作と考えられている。室町期から江戸期にかけて尊重され、多くの注釈書が著されたが、幽齋の『詠歌大概抄』は、それまでの『詠歌大概』注釈を集大成したものととして、近世の注釈書に影響を与えた。『詠歌大概抄』は天正14年(1586)8



古来歌合之事連々欲類聚之、而先年夢中云、為知先達之遺訓者、可見俊成定家等之判詞云々、依之弥有其志、如今達 天聽刺以御使也足軒二合被借下、予大幸何事如之乎、加之為道冥助不遺毛筆、仍借数多之手不日奉書写校合、即令返上之、於册数者在別目錄、同加入箱内者也、深可秘之、以 勅本奉書写之分奥書之案左注之

慶長五年仲夏中澣
玄旨(花押)

[I] 永青文庫蔵『天徳歌合』奥書
慶長5年4月中に書写させ、校合した歌合類のなかの一冊の最後に記す奥書で、幽齋の筆になるもの。袋綴一冊。縦25.6センチ、横20.2センチ。

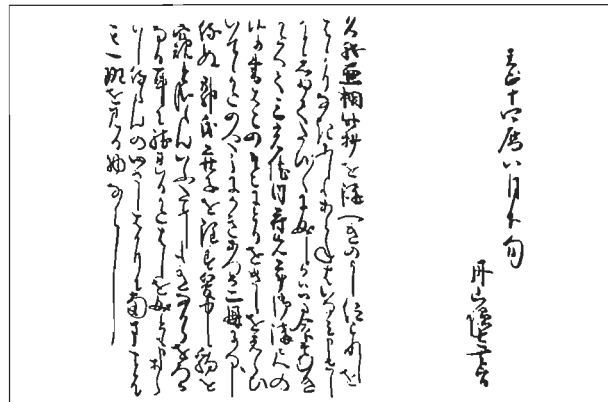
月に三条西実枝から受けた『詠歌大概』講釈の聞き書きをまとめたもので、永青文庫本は幽斎の真跡とする証文を添えて細川家に伝存し、その最も初原的な本文形態を伝える証本として貴重な伝本である。ただ、その筆跡からすれば、幽斎筆本の転写本と思われる。

[Ⅱ]はその成立事情を伝える幽斎の奥書で、権大納言久我敦通（時に22歳）からのたびたびにわたる要請に背きがたく、三光院内大臣（実枝）の御講釈の聞き書きを編んだことを記している。のちに、文禄のはじめごろ、後陽成天皇・八条宮智仁親王等がこれを求めて自ら筆を染めるほどにもてはやされた。

慶長の初期ごろ、幽斎は文事に多忙であった。幽斎は歌合を、古人の和歌批判をそのまま聞くことができるものとして重宝がった。左右に分けた歌人の歌を組み合わせて優劣を判定したこの文学行事は、和歌および歌論の発達を促す重要な契機となったものである。幽斎はすでに数篇の歌合を写していたが、慶長5年（1600）4月、さらに皇室所蔵の歌合類を借り出し、高

弟たちの協力によって書写し校合を加えた。[Ⅰ]はその中の一冊『天徳歌合』の最後に記す幽斎自筆の奥書である。俊成・定家ら歌道の先達の判詞は和歌修学の大事と考えて歌合の類集を願ったこと、その素志が後陽成天皇の聞くところとなり、歌合類を写し得たことを神仏の助けといい、感慨の深さを吐露している。この時、書写した歌合は合わせて44篇、いずれも平安鎌倉期の重要な歌合を網羅しており、加えて皇室相伝の善本ばかりで資料的価値もきわめて高い。『日本古典文学大系』（岩波書店）や『新編国歌大観』（角川書店）などの叢書に、底本および校訂本として用いられているものが多いのもそのためである。幽斎は『耳底記』において、「歌合ほど重宝なる物はあらじ。古人の批判を直に聞く心なり。歌合といふ歌合にわが見ぬは無きなり」と述べ、自信のほどを書きつけている。

（あらき ひさし 文学部教授 国文学）



天正十四曆八月下旬
丹山隠士玄旨

久我垂相此抄を講べきのよし仰られしを、はかりなきにしもあらねばいなみ申せしかど、しめてたびくに成しかば、尊命そむきがたくて、三光院内府先年御講釈の聞書、はこのそこにかりをきしをえらびいで、かたのやうにかきあつめ、二冊になし侍ぬ、郭氏莊子を注す管中に豹を窺と哉らんいふためしも有ながら、をろかなる耳に残れるかたはしを成とも申あらはし侍らんの心ざしばかりに南、まことに其一斑を見る物ならし

[Ⅱ] 永青文庫蔵『詠歌大概抄・秀哥大略抄』奥書
本書の成立事情について述べたもの。幽斎はさらにその次頁にも、徳大寺前内相公維(1537-88)の尊命に応じ証本として書写した旨、記している。本書はその転写本。布表紙袋綴2冊。縦25.7センチ、横20.5センチ。